展望

北の国に生きる

鈴木　竹志

北山あさひの第一歌集『崖にて』（現代短歌社）の最初の印象は、随分荒削りな歌を詠んでいるなあという程度だったのであるが、気になって読み返してみると、荒削りな歌の中に、私を刺激してくるものがあることを認めざるをえなかった。まず、このような歌が私を刺激してやまない。

わたくしを心臓が呼ぶ東北に緊急地震速報起てり

「震度7！震度7！」と叫んでる桜田そんな声が出るのか

一枚のＦＡＸ抱いて駆けて行く　字幕を作る　津波が来ると

ゲンパツガバクハツシタと声がして見れば酒井の小さなからだ

これらの歌は、「報道部にて」と題する一連三十五首から引いた歌である。なお題の次に「二〇一一年三月十一日～十四日、札幌市内Ａテレビ局での記録」と注が記してある。まもなく発災から十年となる二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災発災直後の歌である。作者はテレビ局勤務であった。テレビ局という現場にいた作者が直面せざるをえなかった災害報道の実際を実に生々しく描くことに成功している。これらの歌はその時、その現場にいた者にしか詠めない歌である。一回性の歌である。しかし、十年という節目の時を迎えようとしている今、この歌が私たちの目の前にあること自体に意味があることも確かである。記憶は常に風化する。風化する記憶に、新たな記憶を呼び込んでくる歌とも言えるのではなかろうか。

ただ私はこのような災害報道の現場を詠んだ作品だけをもってして、この歌集のすべてだと語るつもりは毛頭ない。歌集を読み進めると、惹かれる歌が次々とあらわれる。そういう歌の中から特に注目した歌を取りあげてみたい。

夕暮れの空をがりがり引っ掻いてポプラが呼んでいる雪嵐

三月のガラスにどんとぶつかって消えてゆく風　こわがるべきか

真夜中を一直線に冷えてゆくドアノブ、指輪、百円玉　寝る

冬に降る雨のなければ冬に立つ虹もまたなし炬燵でひるるね

これらの歌は、北海道の冬の厳しさを詠んでいるのだが、冬の厳しさを詠む視点が新鮮である。一首目、二首目は、オノマトペを用いた擬人法が効果的であり、私のような東海地方に住む者に恐怖感を抱かせるのに充分である。三首目、四首目の歌には、北海道に住む人間だからこそ詠むことのできる歌であり、北海道の冬の実際を教えてくれる。これらの歌を読み、北海道在住の歌人として新たな若手が名乗りをあげたことを確信した。

もちろん北山は北海道の冬の厳しさを詠みつつも、北海道も、そしてその冬も愛していることは間違いない。こんな歌もある。

冬の子はプラスチックの橇の上にすんすんとせり匂うの雪は

こどもたちつららを食べる雪を食べる花が咲いたら花食べるべし

木の橇に私をのせてぎょうざ屋へ向かいたる　吹雪、なのに

子供の時の記憶をもとに詠まれている歌であり、冬の厳しさをものともせずに生きる人々が登場する。吹雪の中、作者を橇に乗せて「ぎょうざ屋」へ向かう祖父の姿はとりわけ印象深い。